

Vision

「基礎医学と臨床医学の壁」

琉球大学医学部形態機能医科学講座 生理学第一分野

小杉忠誠

医学部を卒業する時期になると、将来の進路を決めるのに学生は大いに悩んでいる。基礎医学の分野に所属している私のところには、毎年4～5名の学生がアドバイスを求めにやってくる。興味のある分野がすでに見出せている学生には、経済的、社会的な将来設計を中心としたアドバイスに終始するだけで充分である。未だ見出せていない学生には、私自身の大学卒業後の今日までの道のりを、疑似体験ではなく、実体験のものとして参考までに話している。毎年1月から3月の学期末には、このように学生と進路について話し合う機会が多くなる。私自身のこれまでの歩みを思い出すと同時に、なんとはなしに元気な気持ちになってくる。いくら多忙であっても、卒業予定者とはよく話をしている。

医学部卒業してからの進路には、基礎医学の道に入るか臨床医学の道にはいるかの二大別がある。しかし、この分け方にもいささか私には納得のいかないところがある。現象的、外在的に分けることは可能かもしれないが、本質的には分けることはできないのではないか。敢えて二大別するのは、「医学の進歩」の効率性を追求するためではないかと思えてならない。これからの大学にあっては、経済効率の追求もますます活発化するであろう。これまでの専門分野の区分、区別を吟味し、それらの統合や分別の作業を、ますます活発化し先鋭化すると思われる。このような現状にあっては、従来通りの分別を固定化せずに従来とは

異なる新しい分別を模索する努力が必要であろう。

1960年代後半は、液性免疫の知識が豊富化された時期であり、当時学生であった私は強い学問的興味をもった。特に、IgAを中心とした局所免疫の発現機構に新鮮な驚きを覚えた。感染症を扱う診療科に進みたいと思い、小児科、皮膚科、耳鼻科等に興味が湧いてきた。“Seeing is diagnosis.” が成り立つ領域の疾患を取り扱う臨床科では、老医師であっても豊富な経験を生かして診療活動ができると思い、耳鼻咽喉科を専攻した。耳鼻咽喉科領域の臓器には、「生理的炎症」という状態があり、治療対象となる炎症は「慢性炎症の急性増悪」である。「急性増悪」を診察できなければ一人前ではないと教授に云われた。確かに口腔内、扁桃をみれば急性炎症の診断はできる。しかしながら、診断はできても治療ができなければ臨床医ではない。慢性炎症は常に生理的に存在し、それが急性増悪化する。この増悪する原因やメカニズムを熟知していなければ治療はできない。原因の追求を人間の症例で行うには限界がある。ウサギに実験的扁桃炎を作製した。炎症の急性増悪は、扁桃構成細胞の化学伝達物質の産生、放出量の多寡によるのが解ってきた。病態の動物モデルを作り、その解析結果から急性増悪のメカニズムを知ることができた。「家兎扁桃リンパ球由来の化学伝達物質」の研究は、誰もやっていなかった。当時の臨床場面では、抗プラスミン剤の使用によ

り、扁桃炎の急性増悪の寛解が多くみられるのを臨床医は経験していた。しかしながら、抗プラスミン剤の効果発現の機序は解明されていなかった。

その当時、「抗プラスミン剤の研究」の二大潮流が日本にあった。徳島大学医学部酵素研酵素生理（当時、藤井節郎教授）、神戸大学医学部生理（当時、岡本彰祐教授）の両教室が競って、プラスミンや抗プラスミン剤の研究を行っていた。私はこの2つの教室に国内留学をして、研究を指導して頂いた。「薬物開発」のための基礎研究の進め方を初めて知り、感動を覚えたのはこの両教室での研究活動からであった。また、臨床医学は基礎医学に支えられているのを実感した。耳鼻科の臨床を8年経験した後に、基礎の生理学教室の助手になった。臨床の教室から基礎の教室へ移ったのである。

私は、基礎医学と臨床医学との間に明確な「壁」は存在しないと学生に話している。「壁」を作っているのは、「壁」を作る方が有利だと思っているからであり、その壁が固定化してしまうと何の疑問も感じなくなるのが恐ろしい。「話せばわか

る」等という問題ではなくなっているのではないか。入口が異なっているだけのことであり、入口には種々のものが沢山あるように思う。基礎医学から臨床医学、あるいは臨床医学から基礎医学へと転向したとしても知的興味の継続性は保持されている。基礎医学と臨床医学に分別することは、本質的には間違いであることを学生ばかりではなく、研究者にも、一般の方々にも大いにアピールする必要がある。「若手生理学者の育成」の必要性が論じられて久しいが、「壁」が若手生理学者の育成の障害の一因であるのも確かである。そもそも、「医学の進歩」には、基礎医学と臨床医学が相互に補完することが不可欠である。堅牢な「壁」は、その進歩を妨げることになる。「壁」を破壊し、両者の対立的な分別を無くすることが、医系の大学で生理学を教育、研究している者の任務であると思われる。しかしながら、この「壁」の除去を行うために、顕在化した制度として実現させるには長時間を要する。直ちに始めなければならないのは、「内なる壁」を無くすることであろう。